

平城京漆紙文書補遺

1 はじめに

奈良文化財研究所では、平城宮・京跡から出土した漆紙文書について、2005年に『平城京漆紙文書1』（奈良文化財研究所史料第69冊）を刊行し、平城宮跡3件、平城京跡8件、計11件の発掘調査で出土した漆紙文書計56点を報告した（漆紙文書第1号～第56号）。

その後の再調査の過程で、新たに2点の漆紙文書を確認したので、ここに報告することとする。新たに確認した漆紙文書2点は、いずれも既報告の漆紙文書が出土した発掘調査で出土したものであり、以下、次數ごとに紹介する。

2 左京二条二坊十三坪出土漆紙文書（第57号、図I-71・72）第131-31次調査（6AFF）

調査と遺構 この調査は1982年に実施したものである。左京二条二坊十三坪ではこの調査他に、第141-5次、第151-11次（東区・西区）、の各調査が実施されており、8世紀前半から10世紀末に至る6時期の遺構を検出している¹⁾。

漆紙文書は、遺物包含層から出土したもの1点（平城京漆紙文書第8号）を既に報告している。これは、c手法の土師器碗Aに付着して出土したもので、器高が低く杯に近い（図I-70）。付着する漆は黒褐色を呈し、恐らく顔料を加えた黒漆であろう。時期は奈良時代後半である。

出土状況 今回報告する漆紙文書第57号は、調査区北東隅に設けた調査用の排水溝の掘削時に、同じく土師器碗Aの断片に付着した状態で出土した。所属遺構を明確にはしがたく、第8号漆紙文書と同様に、遺物包含層の

可能性が高い。こちらの土師器碗Aは径高指数が44前後で、奈良時代後半の碗Aとしては一般的なプロポーショナルである。

墨書の状況 墨痕はオモテ面から1行2文字観察できる。紙背文書は確認できない。文字の大きさは現状で約1cm四方であるが、遺存状態が悪く確定は困難である。

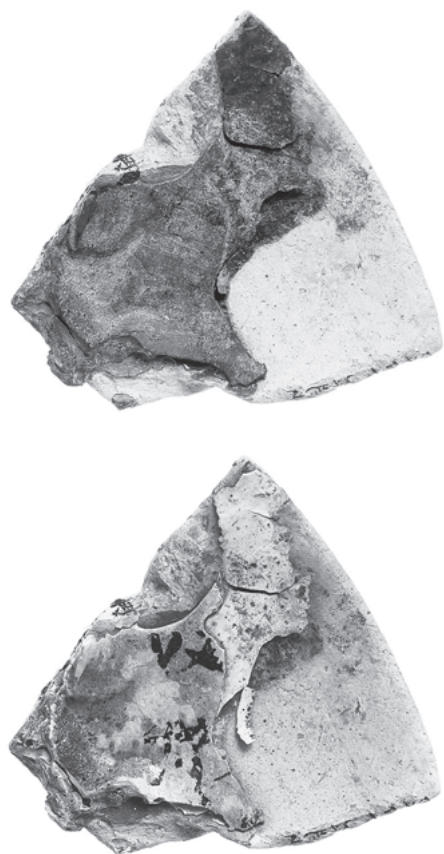
3 左京八条一坊六坪出土漆紙文書（第58号、図I-73・74）第160次調査（6AHL）

調査と遺構 この調査は1984年に実施したもので、六坪から西隣の三坪にかけてを対象として調査した。漆紙文

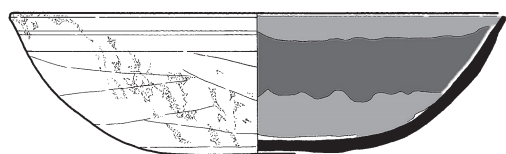
五七
□□
(奴カ)

平城京左京二条二坊十三坪出土漆紙文書
(第一三一—三二一調査)
6AFF

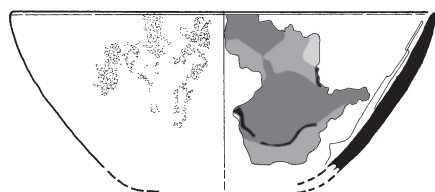
FGZ



図I-71 平城京漆紙文書第57号可視光写真(上)と赤外線写真(下)(1:1)



図I-70 平城京漆紙文書第8号土器実測図(1:2)



図I-72 平城京漆紙文書第57号土器実測図(1:2)

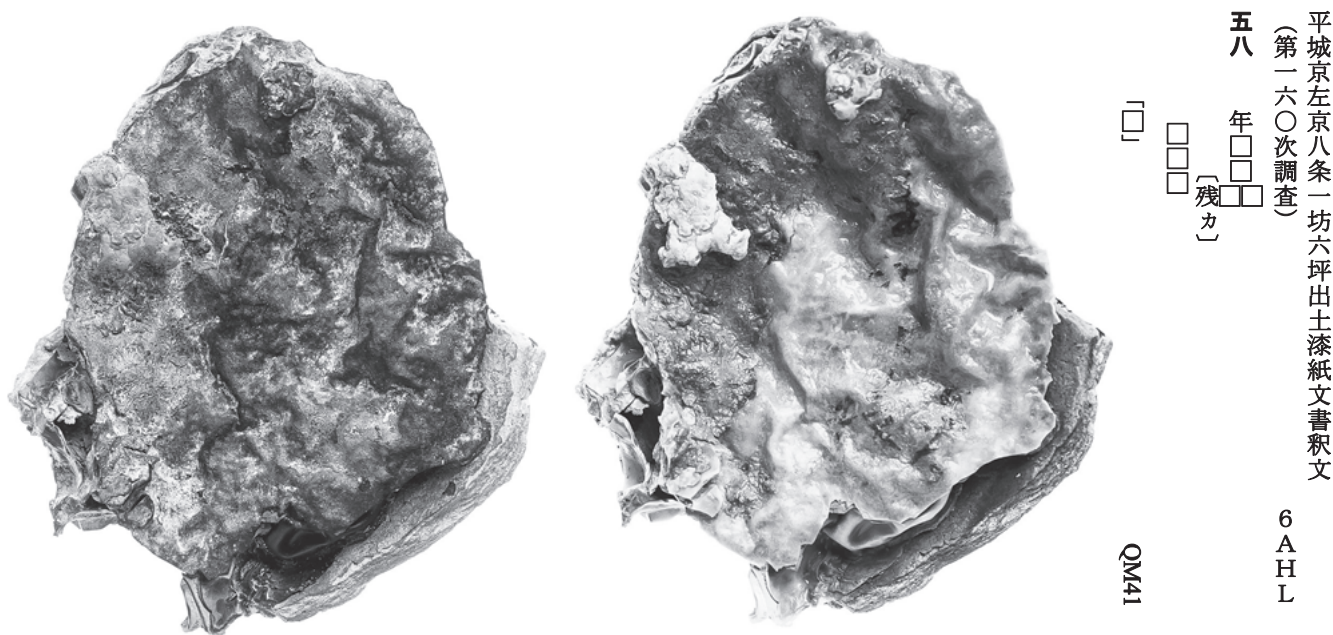


図 I-73 平城京漆紙文書第58号可視光写真(左)と赤外線写真(右)(1:1)

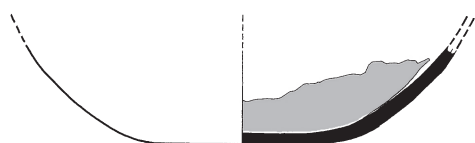


図 I-74 平城京漆紙文書第58号土器実測図(1:2)

書が出土した六坪の遺構は、A1、A2、B、Cの4時期に区分できる²⁾。

漆紙文書は、掘立柱建物SB3190の柱穴から出土したもの1点(平城京漆紙文書第9号)をすでに報告している。SB3190は、B期(奈良時代後半から末頃まで)に属する南廂付き東西棟掘立柱建物で、漆紙文書は身舎西南隅の柱抜取穴から、曲物に入った生漆の液面に付着した状態で出土した。

出土状況 今回新たに報告する漆紙文書第58号は、遺物包含層のもので、これも第57号と同様に、c手法の土師器碗Aに付着した状態で出土した。曲物に入った生漆から土師器碗などの器に小分けして、顔料と混ぜあわせるなどしたのであろう。

出土位置は、第9号が出土したSB3190の身舎中央部で、第9号が出土した柱穴から5～8mの近接した位置にあたり、関連する遺物の可能性がある。

なお、漆紙文書第9号の出土地区を『平城京漆紙文書1』の「漆紙文書番号・図版プレート・旧報告番号対照表」では「QL63」と報告したが、「QL43」に訂正する。

墨書の状況 墨痕はオモテ面から2行観察できる。界線・紙背文書は確認できない。行間は約1.7cmをはかる。

1行目本文が年齢を示し、細字双行部左行が「残疾」だとすると、籍帳類の歴名文書とみられる。そうであれば、細字双行部右行の字は、残画から判断して「耆」または「老」の可能性はある。

このほか左端に1文字分の墨痕があるが、字の向きが他と異なるので、別の紙の文字が付着した可能性が高い。

4 平城京出土の漆付着土器の概観

平城京から出土した漆付着土器を概観すると、点数では須恵器と土師器が拮抗しているものの、土師器では供膳具が7割に対し、須恵器は壺類が6割を占める。運搬に用いたものは須恵器長頸壺が多く³⁾、パレットとして用いたものは須恵器杯や杯蓋、土師器杯、碗が主体である。

なお、文字は確認できないが、第8号漆紙文書と第57号漆紙文書が出土した第131-31次調査や、第58号漆紙文書が出土した第160次調査では、ほかにも漆が付着した土器が出土しており、器高の低い碗Aや碗Cが多いという特徴がある。奈良時代後半の漆工に用いられた土器を考える上で興味深い。

(渡辺晃宏・神野 恵・古尾谷知浩/名古屋大学)

註

- 1) 奈文研『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』1984。
- 2) 奈文研『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』1985。
- 3) 玉田芳英「漆付着土器の研究」『文化財論叢Ⅲ』同朋社出版、1995。